平和を願う祈り

神よ わたしをあなたの平和の使いにしてください
憎しみあるところに 愛をもたらすことができますように
いさかいあるところに 赦しを
分裂のあるところに 一致を
迷いのあるところに 信仰を
誤りのあるところに 真理を
絶望のあるところに 希望を
悲しみのあるところに よろこびを
闇のあるところに 光を
もたらすことができますように
助け 導いてください

神よ わたしに
慰められることよりも 慰めることを
理解されることよりも 理解することを
愛されることよりも 愛することを
望ませてください

自分を捨てて初めて
自分を見出し
赦してこそゆるされ
死ぬことによってのみ
永遠の生命によみがえることを
深く悟らせてください

歴代司祭からお祝いのことば

ヨゼフ 続橋 和弘司祭
“ 神居にこそ教会が ”

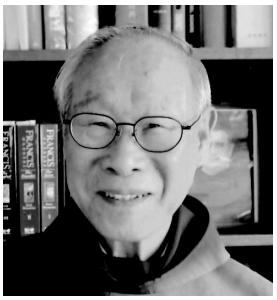
献堂50年おめでとうございます。

長いキリスト教禁止令の高札が撤去されたのが、明治6年でした。しかし、信教の自由もなく、相変わらず邪教扱いされました。明治 21 年に、条件付きの信教の自由が公布されましたが、当時の函館新聞には、「排耶蘇教演説会」が頻繁に開かれたと書かれています。明治26年には、全国的に「破邪叢書」が出回りました。「耶蘇」とは、キリスト教のことで、それを「破邪」とは、邪教キリスト教を排斥するということです。

そんな中、明治 34 年、第七師団とパルプの町、そして昭和 42 年に、「神の居る所に教会が」建ったのです。

私が神居教会でお世話になり、いろいろと教えて頂いたことは、短い間でしたが、神居教会は、フランシスコ会フルダ管区の宣教の証し場として輝いていると信じております。

これからも神居教会が、守り、維持する教会から宣教する教会として神居に居座り続けますようお祈りしております。



ヘルマン渡辺 義行司祭
“ 50年のお祝いに ”

「私と同じものを持っていてね」と言って少女は小さな十字架のペンダントを私に渡してくれました。久々に、この十字架を眺めながら神居教会での教会学校の日々を思い返しております。

私が最初に派遣されたのは、神居教会でした。閑静な住宅に囲まれた教会で、これからどう取り組んでいったらよいのかと考えあぐねました。そのうち、ふっと信者のお子さんたちに心が向かったのです。

その子どもたちが、放課後そのまま教会に来て遊んだり、祈ったりするようになりました。それから 6 か月後、その子どもたちが子どもたちを連れてくるようになり、あっという間に100人にまでなったのです。

あの子らは、今、どこでどうしているのでしょう。よい便りを子どもたちが伝え合った姿を思いだしながら、新

たな宣教を模索し合いたいものですね。おめでとうございます。

ロマーノ　長尾 俊宏司祭
“ 北海道での宣教の原点 ”

神居修道院、教会献堂 50 周年おめでとうございます。私は叙階後（1972 年）東京の板橋教会で 2 年間助任として働き神居修道院に来ました。当時フルダ管区旭川地区と呼んでいたと思います。旭川地区はホームグランドでしたし、先輩の神父、修道士さん達と共に働けると楽しみに帰ってきました。新しい修道院は札幌からのメンバーもそろい、元気な楽しい共同体でした。旭川藤女子高校の専任講師をしたり、主任司祭の渡辺神父さんの教会学校を手伝ったり、利尻の合宿に行ったり楽しい思い出が一杯です。

当時は各教会には、子ども達も多く賑やかな元気な小教区がたくさんありました。高校生、青年会も多く高校生とは、センターで黙想会や夏のサマーキャンプ（地方の会館）をみんなで自炊しながら楽しんだ日々を思い出します。

主任司祭は、2 年？ 3 年？あまり覚えていませんね。修道院生活と教会の仕事がいつも同時進行だったので、いつも修道院のメンバーと教会の皆さんと一緒に生活していた思いです。メンバーに守られながら教会の皆さんには大事にされて過ごせたことを感謝しています。特に神居修道院、教会は私の北海道での宣教の原点でもありますし、ありがとうございます。これからも祈りのうちに宜しくお願いします。

アポロニオ　佐藤 宝倉司祭
“ 復活！愛が育む「巣箱」のように ”

神居教会献堂 50 周年おめでとうございます！ 東京三軒茶屋教会で 1 年間司祭としての訓練を受け、1987 年 4 月青函連絡船を降り立ち、雪解け時期のくすんだ空を眺めながら函館本線を一気に北上し、神居教会に辿り着きました。ひと月位は何をして良いかも分からず、ボーッとしていたように思います。次第に分管区長ルーペルト師から様々の薫陶を受け、新緑の春を演出する木々の芽吹き、中庭のローンが鮮やかな緑色に変わるころになると、信徒の皆様から一つ一つ指導を

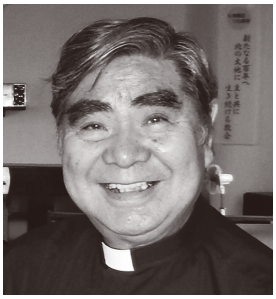
いただくようになりました。特に信徒会長の T さんからは、会議の進め方、人との交渉の仕方を学び、話し方教室を開いていただきました。「神父様 (当時 28 歳) は若くても、わたしたちみんなのお父さん ...」尻がむず痒くなるのを感じつつも、深く考えさせられるものがありました。本来ならば「この若僧が、何を言ってるのか？」と、言われても仕方のないような場合でも、決して声を荒げる方ではありませんでした。初夏に入り、旭川藤女子高等学校での授業も楽しくなってきた頃、数名の信徒の方々が怒鳴り込んできました。「A 師の交通事故による突然の死を何故信徒に直ぐ知らせないのだ!?」という訳です。事故の一報を受け取ったのは私で、直ぐ地区の司祭には電話で知らせたのですが、信徒会の連絡網を使う事に気が及ばなかったのです。信徒の皆さん曰く、「A 師は、長い間お世話してくださったわたしたちのお父さんなんだぞ！」。この時改めて「お父さん」の意味には深いものがあると考えさせられました。青臭いワンパクぼうずのやる事で、信徒の皆さんや V 会のシスターさんには多大な忍耐を強いる結果になりました。唯一やって良かったと思っている事は、ゴミサの前にご老人の皆さんを車で迎えに行った事です。安全や保険の事を真っ先に考える事を常識としている方々からは、決してよく思われる事ではないかもしれませんが、「愛」を第一に考える時、常識の中には、愛がない事を発見するのは私だけでしょうか。愛の為に共に戦って下さった皆さんに感謝申し上げると共に、この愛が、また神居の庭に芽吹き、復活する事を期待して祈ります。このように、神居教会は、若い司祭たちの成長を育む「巣箱」のような存在だったと思います。

ヴァレンチノ山本 孝司祭

“ 50 周年おめでとうございます ”

わたしが神居教会に来たのは、司祭叙階から 5 年後の昭和 56 年でした。当時、神居修道院には管区長のルペルト神父様がいて、他にたくさんのブラザーがいました。わたしはまだ 30 代で元気がよく、旭川藤学園と旭川みその幼稚園にも通っていました。神居教会での思い出として、みんなで手分けしてチラシを配り、第１回の慈善バザーを始めたことがあります。教会学校の夏の合宿を富良野教会でした年には、わたしは富良野の幼稚園バスを借りるために、大急ぎで大型の運転免許をとりました。その後でマンフレード神父様から古いバスをもらい、子供たちを乗せて、ウトナイ湖まで白鳥を

見に行ったこともありました。そのころ活躍していた人たち、お世話になった人たちの多くは、すでに天上の教会のメンバーになっています。自分もそのうちでしょうが、これからもずっと神居教会の発展を見守っていきたいと思います。



ベネディクト　谷津 良勝司祭
“ 沢山の恩人達の祈りで ”

心から敬愛するフランシスコ会旭川神居修道院、神居教会の 50 周年を迎えて、皆さんにお祝い申し上げます。

私は 9 年間、夏暑く冬寒い御地で働くことが出来て神に感謝し、なつかしく一人一人の信者の方々の顔を思い出しています。ウルバン神父様、亡きアントニオさん、コンラードさんと働きました。

教会学校の先生達に助けられて、生徒達と夏の合宿冬の雪中運動会となつかしい思い出です。みんな大きくなって、お父さんお母さんになっていることでしょう。小学生の頃、神居教会でたくさん遊んだ日々、主任司祭室で朝早くから夜までファミコンに熱中した日々も忘れないでしょう。

ドイツ人のルドビコ修道士さんが、たんせい込めて作ったブドーやポポの味をまだ憶えている方もいることでしょう。

月 1 回の司祭会議には、道内で働いている 30 数名の神父様方が、旭川本部の修道院に三々五々集まって来て、共同ミサを捧げました。武宮神父様、浅井神父様、ルッペルト、ヤヌワリオ、ニコラオ、お世話になった懐かしい神父様方でいっぱいでした。

カトリックセンターの前の石の上に神父様の名前が刻まれています。

どうぞ、とりつぎを祈って下さい。

この修道院、教会は、沢山の司祭修道士さん達の血と汗の結晶です。

神居教会は、沢山の恩人達の祈りで、守られていることを忘れないで下さい。

私は、いつも祈っています。

アンドレア　鈴木 央司祭
“ 50 周年おめでとうございます ”

ひとえに神に感謝ですが、神に導かれた人間の努力もありました。それ

は、歴代の信徒、奉献生活者（修道者・在俗会員）、司祭、司教によるものですが、その一翼を、長い間日本に宣教師を送り続け、熱い祈りと共に経済的援助を惜しまなかった、ドイツ・フランシスコ会旧フルダ管区の兄弟が担って来ました。

フランシスコ会宣教 100 周年（2008）の前年、シーグフリード・クレックナー元・母管区長が、黙想の家正面左下に設置されていた礎石を探して、灯油タンクと車椅子用スロープで隠されてしまったことを嘆き、その思いを伝えて下さいました。私は迷うことなく、手前の建物の下に移設する約束をさせて頂きました。

この石は、フルダ市にある、ゲルマンの使徒聖ボニファチオの墓石の一部です。センター建設時に、フルダ管区より贈られました。

家造りの捨てた石が隅の親石となった。
これは神の業。
人の目には不思議なこと（詩 1. 18）

この石を見る度、聖人を初め、既に亡くなった先人達を思い起こし、力強く信仰を宣べ伝える決意を新たにしたいものです。

もし一粒の麦が地に落ちて死ななければ
それは一粒のままである
しかし　死ねば　豊かな実を結ぶ
（ヨハネ 12 章 24 節）